

楽草舎観察会

場所： 京都御苑

日時： 2019年2月21日 10時～14時

コース： 中立売休憩所から北回り清和院御門まで

人数： 楽草舎12名 スタッフ2名

前日とは打って変わり、肌寒い朝、中立売休憩所前は建物ごと新しく改修され、昔の面影はなくなってしまいました。門前のナギの木が植えられていた囲いはなくなり、建物の周囲は芝の養生中で立ち入れなくなっています。

観察会は宮内庁事務所の南西からスタート。まだ春には程遠い時期で、落葉した木々には冬芽が付き、枝の形などから木々を同定してゆくような観察です。最初はヒュウガミズキ、冬芽がしっかりと膨らみ春が近いことをうかがわせます。続いて八重のヤマブキが植栽された小道を縣井に向かって進みます。葉を落とした何本もの大木は、エノキ、ケヤキ、ムクノキという、代表的な木ですが、特徴的な木肌を説明し同定します。エノキは比較的さらっとした木肌にところどころ横の線がはいっています、ケヤキは何といても独特の紋が見られること、ムクノキは表皮がはがれているなどの特徴を捉えればかなりの確率で名前を知ることができます。これだけでわからない場合は落葉した葉を見つけて決めていきます。

たくさん掃き寄せられた落ち葉の中から、たくさんのどんぐりが見つかります。ここで恒例のどんぐりクイズでひとしきりもりあがりました。春を前にしたどんぐりは地中に向け発根し、発芽の準備をしています、間もなくあちこちから新しいアラカシの子供たちが日の光を求めて顔を覗かせます。何本も植栽されたマテバシイの中から、雄花、雌



花を探しますが、目線で見えるところにはなかなか見つかりません。やっとのことで目にすることができました。2年生のどんぐりのため小さな子供のどんぐりが見つかりました。これから秋に向かって急速に大きくなり秋の恵みへと変貌します。

乾御門のわきのクスノキの大木を眺めながら、御苑の北側に入りますが、いきなり通行止めの札が。今年の台風で多くの木々が倒れ、まだ手を付けられていないところ。根返りした大木がそこかしこにみられ、無残な姿を見せています。またまた葉



を落とした大木が現れ短枝をつけた特徴的な姿からイチョウを観察、落枝を手にとって短枝の形状や葉痕とそれによる推定年数、その先の冬芽の中を覗いてみたりとなかなかの盛り上がりでした。このイチョウは銀杏をつけない雄の個体です。雌雄を見分ける方法を参加者がいろいろ言っておられましたが、ほとんどすべて（葉の先が割れている、銀杏の稜の数など）が俗説であること、具体的に見分けるのはDNA以外ないことを説明しました。

途中でヒイラギナンテンの受粉時の雄蕊の動きを観察し、倒木をかいくぐり児童公園の北側に出ると、落ち葉をデザインしたようなきれいな状態の遊歩道に出会いました、落ち葉が踏み固められ偶然にできた造形に見とれながら歩くと、唯一の満開のロウバイに出会え、盛りは過ぎていますがまだほのかな香りが漂っていました。

次に現れたのは木肌が特徴のカゴノキです。樹皮がはがれた跡が、小鹿の肌の文様にそっくりなところから名づけられたものです。カゴノキの幼木もたくさん見られるのですが、葉は間違いなくカゴノキですが、木肌はまだ名前のように小鹿文様ではありません、何年ぐらいつれば文様が現れるのでしょうか。何本かの幼木の年齢を確認しましたが、5年、6年ではまだ文様は現れてきていませんでした。シカのように1年で大人のように変貌はしないようです。桂宮邸跡の西側のムクロジの下で果実を拾い早速シャボンの実験です。サポニンが含まれていることを口で説明するより百聞は一見にしかずで、ペットボトルに水と果実を入れ振ってもらいました。ムクロジは特にサポニンが多いのでたくさんの泡が出て後の説明がスムーズに進みました。子供が中に入れそうな木のうろや、カゴノキの大木を見ながら中山邸跡では下見の時は真っ赤な果実をつけていたクロガネモチがすっかり



り果実を落としており、冬の見どころをなくしましたが、代わりに紅白の梅が今まさに咲こうとつぼみを膨らませている状態に出会えることができました。鳥の水場の近くでは、春先に咲くウグイスカグラがみられ、野鳥観察の人たちのそばを静かに通り過ぎ、母と子の森で昼食、ナツツバキの生える染殿井をとおり、イヌビワの倒木、アオキ、マユミなどを観察し、北側では固いつぼみを抱いたフッキソウも日当たりのよい南側ではまさに咲こうとする姿を見て、京都迎賓館の南の清和院御門で解散いたしました。（上月）